

非行少年の自己意識に関する研究（その2）

矯正協会附属中央研究所 大川 力
 淵上 康幸*
 東京矯正管区 門本 泉**

キーワード：非行少年，自己意識，自尊感情，セルフ・エスティーム，社会的スキル

1 はじめに

前年度は非行少年の自尊感情に注目し，非行に関わる種々の属性との関連について分析を行った。その結果，家庭の養育環境が不安定であった群や，教護院や養護施設への入所歴があった群は自尊感情が弱いことを見出した。また，少年鑑別所における鑑別判定において，在宅保護と判定されていた群よりも，施設収容相当と判定されていた群の方が自尊感情が弱いことを見出した。さらに，自尊感情の強い群は社会的スキルも高いことを見出した。

自尊感情は一般的には自尊心と呼ばれているものであるが，それが高すぎることはうぬぼれ（自惚れ）に通じるし，低すぎると必要な自己主張もできないこととなる。したがって，適度に自尊心を持つことが社会生活を送る上で重要なこととされる。そして自尊心が脅かされそうな事態に対して，その人がどのように行動するかは，社会的不適応や問題行動の発現に関連していると考えられ，心理学の研究主題となっている。本研究では，前回報告に引き続き，自尊心が脅かされるような事態におかれたとき，どのように自尊心を維持しようとするか，すなわち自尊感情維持の

ための方略と非行との関連について検討する。

2 方法

調査の対象者や方法は，前報告と同じであるが，要約すれば次のとおりである。

(1) 調査対象者

全国の少年鑑別所に平成9年9月から11月までの2か月間に観護措置決定により入所した者のうち，鑑別判定を行った者で，1,808名の調査票が得られたが，そのうち未記入の部分が多い調査票を除外し，合計1,795名（男子1,580名，女子215名）を分析の対象とした。

(2) 調査内容

調査票は，次の2種類である。

ア 職員用調査票

調査対象となった者について，性別，年齢，養育態度，MJPIスコア，入所回数，鑑別判定等26項目についての調査で，鑑別担当職員に記入を依頼した。

イ 少年用調査票

全部で68問からなる質問紙を用いたが，質問は，次の4種類で構成されている。

① 自尊感情尺度

Rosenberg, M. (1965)によるもので，10項目で構成される。

*現新潟少年鑑別所

**現東京少年鑑別所

② 社会的スキル尺度

菊池 (1988) によるもので、18項目で構成される。

③ 自尊感情維持方略に関する項目

自尊感情を傷つけないようにするために自分が行っている方略に関するもので、次の4種類、36の質問で構成した。

ア セルフ・ハンディキャッピング

Jones, E. E. ら(1978)の理論によるもので、「簡単なことができないと恥ずかしいので、わざと難しい方を選ぶことがある」などの9項目から成っている。これらの項目は、Jones, E. E. ら(1986)による尺度の沼崎ら(1990)による日本語版を参考として作成した。これは、自らハンディキャップを作ることで失敗した時の言い訳を事前に用意し、自尊心が傷つくことを避けようとする行動を意味する。

イ 自己意識の低減

Duval, S. ら(1972)の理論によるもので、「やけになって酒を飲んだり、大食いをしたことがある」などの質問9項目から成っている。これは、飲酒や遊興等にふけることでふがない自己を直視することを避けようとする行動を意味する。

ウ 威嚇的自己呈示

Jones, E. E. ら(1982)の理論に基づき、「自分を馬鹿にする相手は、痛い目にあわせる」などの9項目の質問から成っている。これは、自信のなさを隠すためにことさら虚勢を張る行動を意味する。

エ 哀願的自己呈示

ウと同様Jones, E. E. ら(1982)の理論に基づき、「自信のない時は素直に自分の弱いところを見せて助けてもらう」などの9項目の質問から成っている。これは、自分が弱く無力な存在であることを周囲に示すことで自分の能力が試されるような場から逃れ、自尊心が傷つくことを避けようとする行動を意味する。

④ 自己概念不安定性尺度

上瀬ら(1995)による「自分のことが好きになったり嫌いになったりする」など4項目の質問から成る。

以上のうち③④の質問内容は資料として論文末に掲げた(①②の質問内容と調査の結果については、大川ら(1998)参照)。

3 結果

(1) 自尊感情維持方略の尺度の検討

先に述べたように「セルフ・ハンディキャッピング」「自己意識の低減」「威嚇的自己呈示」「哀願的自己呈示」の質問は、それを表す具体的な行動を9項目づつ挙げ、自分がそうした行動をとるかどうかを聞いたものである。

まず、各項目の尺度としての有効性を見るため、統計学的な検討を行った。その詳細は省略するが、方法としては、回答の分布、G P分析、因子分析を用いた。

こうした統計学的検討の結果、セルフ・ハンディキャッピングは8項目、自己意識の低減は7項目、威嚇的自己呈示は7項目、哀願的自己呈示は7項目が有効な項目とされ、それらの項目の合計得点を各尺度の得点とした(除外した項目は、論文末の資料参照)。

(2) 各尺度の性差および年齢差

自尊感情維持方略に関する4つの尺度について、性別と年齢層別による2要因の分散分析を行った。その結果は表1に示したが、男子と女子では威嚇的自己呈示については差は認められなかったが、他の3尺度は女子の方が男子よりも高い、言い換えれば、そういう方略を女子の方が使いやすいたことが認められた。また、年齢層による差については、威嚇的自己呈示とセルフハンディキャッピングは年齢が低いほど得点が高くなる、言い換えれば、年齢の低い方がそうした方略を使いやすいたことが認められた。

こうした結果から、以下の分析では男女別

表1 性別・年齢層別自尊心維持方略各尺度の得点等

年齢層 人員	男子			女子			分散分析		
	14・15歳	16・17歳	18・19歳	14・15歳	16・17歳	18・19歳	年代差のF値	性差のF値	交互作用
セルフ・ハンディキャッピング	22.33 (4.62)	21.90 (4.93)	20.74 (5.37)	22.61 (4.81)	23.04 (4.91)	22.11 (4.72)	3.069*	5.865*	0.679
自己意識の低減	20.68 (5.67)	21.12 (5.34)	20.59 (5.42)	23.75 (5.73)	23.20 (5.74)	23.57 (5.77)	0.029	42.238**	0.654
威嚇的自己呈示	20.97 (6.10)	19.92 (5.76)	19.24 (6.07)	20.47 (5.46)	20.34 (6.41)	18.92 (5.73)	3.939*	0.083	0.455
哀願的自己呈示	19.52 (3.80)	19.69 (3.92)	19.29 (4.05)	21.33 (4.02)	21.00 (4.38)	20.86 (4.29)	18.048**	2.146	0.837

注) 多重比較により有意な差が検出された箇所については不等号で示した。
数値は尺度毎の平均得点。()内は標準偏差。

** p<.01 * p<.05

に行い、さらに年齢層による有意差の認められる尺度については、年齢層別に分析を行うこととした。

(3) 自尊感情および社会的スキルと自尊感情維持方略との関連

表2は、男女それぞれについて年齢層別に自尊感情得点および社会的スキル得点と、自尊心維持方略の各尺度得点との相関係数を示したものである。

セルフ・ハンディキャッピング尺度は、男子はどの年齢層においても、得点の高い方が、自尊感情得点も社会的スキル得点も統計的に有意に低かった。一方、女子は自尊感情得点はどの年齢層においても男子と同様であったが、統計的には有意とは言えなかった。また、社会的スキル得点は、14・15歳群と16・17歳群

において、負の相関が見られたが、18・19歳群については、相関は見られなかった。

次に自己意識の低減尺度は、男子の16・17歳群と18・19歳群では自尊感情得点と弱い負の相関がみられたものの、14・15歳群では統計的には有意ではなく、女子はどの年齢群でも有意な相関は認められなかった。社会的スキル得点は、女子の18・19歳群について有意な正の相関が見られたが、男子の全ての年齢群と女子の他の年齢群は有意ではなかった。

威嚇的自己呈示尺度は、男子女子とも自尊感情得点も社会的スキル得点も、どの年齢層においても有意な相関は認められなかった。

最後に哀願的自己呈示尺度は、自尊感情得点とは、男子はすべての年齢群、女子は16・17

表2 自尊心維持方略尺度得点と自尊感情得点および社会的スキル得点との相関 (r)

		男子			女子		
		14・15歳	16・17歳	18・19歳	14・15歳	16・17歳	18・19歳
自尊感情	セルフ・ハンディキャッピング	-0.293**	-0.229**	-0.237**	-0.201	-0.138	-0.238
	自己意識の低減	-0.120	-0.192**	-0.097*	-0.187	-0.077	-0.090
	威嚇的自己呈示	0.000	-0.094*	-0.031	-0.114	0.045	-0.111
	哀願的自己呈示	-0.218**	-0.235**	-0.216**	-0.09	-0.229*	-0.228
社会的スキル	セルフ・ハンディキャッピング	-0.273**	-0.245**	-0.370**	-0.368**	-0.312**	0.007
	自己意識の低減	-0.042	-0.052	-0.055	-0.074	-0.143	0.301*
	威嚇的自己呈示	-0.03	0.042	-0.012	-0.062	-0.023	0.169
	哀願的自己呈示	-0.201**	-0.29**	-0.182**	-0.250*	0.004	-0.369**

** p<.01 * p<.05

歳群において有意な負の相関がみられた。社会的スキル得点とは、男子は16・17歳群、女子は逆に16・17歳群を除く他の年齢群に有意な負の相関がみられた。

(4) 鑑別判定と自尊心維持方略

自尊心維持方略と非行性との関連を検討するため、鑑別判定により次の3群に分けた。

在宅判定群 保護観察等社会内処遇が相当と判定された者

短期判定群 少年院（短期処遇）が相当と判定された者

長期判定群 少年院（長期処遇）が相当と判定された者

この3群では在宅判定、短期判定、長期判定の順に非行性が進んでいると一応考えられるが、鑑別判定は非行性だけではなく、個々のケースについての環境要因等を含めての総

合判断によるものであるから、非行性の進捗と直線的な相関があるとは言えない。ここでは、非行性を判定する一つの目安として用いることとした。

各群の性別・年齢層の得点は表3に示した。

セルフ・ハンディキャッピング尺度は、男子は、在宅判定群や短期判定群に比べ、長期判定群の得点が有意に高く、また年齢が高いほど得点が高かった。女子は、短期判定群より長期判定群の方が有意に得点が高かった。

自己意識の低減尺度は、女子の在宅判定群より長期判定群の方が有意に得点が高かっただけで、その他の群では有意差は認められなかった。

威嚇的自己呈示尺度は、男子は在宅判定群や短期判定群に比べ、長期判定群の方が得点が有意に高く、また、年齢が高い群ほど得点

表3 自尊心維持方略尺度と鑑別判定

男子	在宅判定			短期判定			長期判定			分散分析			
	14・15歳	16・17歳	18・19歳	14・15歳	16・17歳	18・19歳	14・15歳	16・17歳	18・19歳	年代差	鑑別判定	多重比較	交互作用
年齢層										F値	F値		F値
人員	66	42	67	293	180	201	274	118	218				
セルフ・ハンディキャッピング	21.89 (4.45)	21.79 (4.93)	20.35 (5.98)	21.95 (4.84)	21.51 >> (4.84)	19.53 (4.46)	23.17 (4.61)	22.34 >> (5.07)	21.60 (5.52)	14.687**	7.099**	在宅・短期<長期	0.757
自己意識の低減	21.48 (5.03)	21.01 (5.55)	20.18 (5.37)	20.38 (5.80)	21.22 (4.86)	20.58 (5.61)	20.72 (5.71)	21.26 (5.49)	21.11 (5.30)	1.506	0.784		0.867
威嚇的自己呈示	20.35 >> (5.51)	19.14 (5.73)	18.67 (5.99)	21.86 >> (5.90)	19.86 (5.51)	18.31 (5.35)	22.03 >> (6.63)	21.00 (5.80)	20.65 (6.23)	9.759**	10.531**	在宅・短期<長期	0.932
哀願的自己呈示	19.52 (3.71)	19.68 (3.73)	19.80 (3.98)	19.85 (3.53)	19.63 (3.37)	19.11 (3.86)	19.30 (3.99)	19.57 (0.49)	18.76 (4.20)	1.557	1.418		1.061

女子	在宅判定			短期判定			長期判定			分散分析			
	14・15歳	16・17歳	18・19歳	14・15歳	16・17歳	18・19歳	14・15歳	16・17歳	18・19歳	年代差	鑑別判定	多重比較	交互作用
年齢層										F値	F値		F値
人員	21	12	28	39	21	29	20	11	16				
セルフ・ハンディキャッピング	23.67 (4.26)	22.55 (5.03)	23.20 (4.42)	21.50 (5.89)	21.90 (3.75)	19.73 (3.44)	22.04 (4.86)	24.55 (5.27)	23.63 (5.30)	0.507	3.442*	在宅・短期<長期	1.374
自己意識の低減	23.90 (6.93)	21.87 (5.79)	22.30 (5.32)	23.42 (5.62)	23.19 (5.06)	23.64 (4.86)	22.30 (5.33)	23.64 (4.86)	26.63 (5.52)	0.314	3.362*	在宅<長期	0.927
威嚇的自己呈示	19.00 (5.02)	20.15 (6.71)	16.45 (5.02)	21.08 (6.50)	19.10 (6.61)	17.64 (5.75)	21.04 (5.68)	21.52 (6.03)	22.63 (3.93)	0.962	5.555**	在宅・短期<長期	1.471
哀願的自己呈示	22.10 (3.09)	20.35 (3.91)	18.95 (3.55)	21.83 (5.78)	21.20 (5.00)	22.18 (4.33)	20.74 (3.76)	21.81 (4.58)	20.31 (5.50)	0.756	1.125		1.267

注) 年齢層において多重比較により有意な差が検出された箇所については不等号で示した。 ** p<.01 * p<.05
性差、年齢差を有する尺度があるため、男女別に、鑑別判定3群×年齢層3群の2要因分散分析を行った。
数値は尺度毎の平均得点。()内は標準偏差。

が高かった。女子は在宅判定群と短期判定群より長期判定群の得点が有意に高かった。

哀願的自己呈示については、男女とも統計的な有意差は見られなかった。

(5) 自己概念の不安定尺度

この尺度は4つの質問から構成されているが、どの質問についても不安定の方向への回答が50%近くあった。また、ある質問については「どちらともいえない」と、不安定とする回答の合計が90%近くになった。このため、このまま等間隔尺度として扱うには問題があり、なお詳細に検討する必要があるので、今回の報告では触れないこととする。

4 考察

以上の結果を各自尊感情維持方略ごとに検討する。

(1) セルフ・ハンディキャッピング

男子は、自尊感情が低い者ほど、また、社会的スキルが乏しい者ほど、セルフ・ハンディキャッピングを多用する傾向があることが明らかとなった。また鑑別判定では、男女とも在宅判定や少年院短期処遇判定の者よりも少年院長期処遇判定とされた者の方がセルフ・ハンディキャッピングを多用する傾向があることが明らかとなった。

前述のようにセルフ・ハンディキャッピングとは、あらかじめハンディキャップがあることを事前に明らかにしておき、失敗により自尊感情が傷つくことを避けようとする行動を意味する。そして、自尊感情の弱い者が自己の無能さが露呈することを恐れて、あらかじめ失敗した時の言い分けとして自分の弱点を見せておく場合と、自尊感情の強い者が、わざとハンディキャッピングを用意しておく場合との2つが考えられる。したがって、セルフ・ハンディキャッピングという手段を取ることは、必ずしも自尊感情が弱いことを示すものではない。

今回の結果から見ると、自尊感情が弱い者ほど、また社会的スキルが乏しい者ほど、セルフ・ハンディキャッピングを多用することが認められた。すなわち、非行少年は、傷ついた自尊感情の回復や自尊感情を損なわないように維持するための方略としてセルフ・ハンディキャッピングを行う場合が多いことを示している。したがって、こうした行動は一時的には自尊感情が傷つく状況を避けることができるかもしれないが、困難な課題に立ち向かい、それをやり遂げることによって得られるはずの達成感や、自信を得る機会をなくしてしまうことを意味する。また、自分の能力の限界を試すことを避けていれば、さまざまな課題に対して適切な目標を立ててその達成を目指すことも困難となる。

自分の能力に自信が持てないために、失敗を恐れて課題に対して積極的に取り組もうとせず、全力を出しきることをしないとといった行動が続けば、結果として社会不適応に陥るのではないかと考えられる。

(2) 自己意識の低減

男子は、自尊感情が低いものほど自己意識の低減を多用する傾向があり、鑑別判定で見ると、女子は、在宅判定や少年院短期処遇判定の者よりも少年院長期処遇判定とされた者の方が自己意識の低減を多用する傾向があることが明らかとなった。

自己意識の低減は、その定義からすれば、飲酒や遊興等にふけることで、自己を直視することを避けようとする行動を意味するものであり、集団非行や薬物乱用との結びつきが強いことが考えられる。鑑別判定と自己意識の低減が、男子よりも女子に顕著な関連が見られたのは、女子の40%近くが薬物犯であることとの関係も考えられる。現実の自己像と理想の自己像との間に大きな差があり、しかも、それを自分の力で埋めるだけの自信もないとき、酒を飲んだり自分と同じような立場にある仲間との遊興にふけり、ふがいない自分自

身から目をそらすことで自尊感情が傷つくことを避けていると考えられる。

(3) 威嚇的自己呈示

これは、自信の無いことを隠すためにことさら虚勢を張る行動を意味するもので、実際の攻撃行動を伴うことになるため、逸脱行動との結びつきも強いと考えられる。威嚇的自己呈示尺度は、自尊感情や社会的スキルとは関連が見られなかったが、鑑別判定においては、男女とも在宅判定群より長期判定群の方が威嚇的自己呈示を多用していることが明らかとなった。これは、自尊感情を傷つけられまいとして攻撃的な行動に出やすいことは、非行性の進展と関連があることを示している。

(4) 哀願的自己呈示

この尺度は、男子は自尊感情が低い者ほど、また、社会的スキルが乏しい者ほど、得点が高くなっている。

哀願的自己呈示とは、自分が弱く無力な存在であることを周囲に示すことで自分の能力が試されるような場から逃れ、自尊心が傷つくことを避けようとする行動を意味するものであり、この方略を多用する者は自尊感情が弱く、社会的スキルも乏しいというのは、その定義から見て当然の結果と見られる。こうした行動が多ければ、社会的自立からますます遠ざかることになるため、結果的に不適応に結びつきやすいと考えられる。

6 まとめ

今回の報告では、セルフ・ハンディキャッピング、自己意識の低減、威嚇的自己呈示、哀願的自己呈示といった4つの自尊感情維持方略を取り上げ、自尊感情と社会的スキルとの関連について検討した。その結果、自尊感情をどのように維持しようとするのかは、社会的不適応や問題行動の発現の心理機制を理解する上で有効な視点となりうることを示し

た。また、4種の自尊心維持方略のうち、セルフ・ハンディキャッピングと哀願的自己呈示は、社会的スキルとに関連があることを見出した。すなわちこうした方略を多用する者は、自尊感情や社会的スキルが低くなっており、社会適応上問題があると考えられるものである。

特に、鑑別判定で少年院への長期収容が相当と判定されるのは、非行性が進んでいると考えられる群であり、この群に哀願的自己呈示を除く他の方略を多用する傾向が見られたことは、非行性の進み方を判定する上での参考として、意味が大きいと考えられる。

また、この結果は、社会的スキルを付与することで、不適切な形で自尊感情を維持しようとすることを抑制し得ることを示唆している。最近矯正教育の中でも、社会的スキルの訓練が取り上げられるようになってきているが、この研究の結果は、それを実証的に示したものとも考えられる。特に非行少年の場合、実生活上困難な問題に直面したとき、一時しのぎのやり方で困難を回避しようとし、見通しを持った行動ができないため、一層不適切な行動をとり非行に結びつきやすいことはよく指摘されているところである。本研究では、自尊感情を維持するために、いかに不適切な方略を取っているかが示されたものと考えているが、今後はより具体的な行動のレベルで解明することにより、矯正教育上参考となるものが明らかにされることを期待したい。

<参考文献>

- Duval, S. & Wicklund, R. A. 1972 A theory of objective self-awareness. NY Academic Press.
- Jones, E. E. & Pittman, T. S. 1982 Toward a general theory of strategic self-presentation. in Suls, J. (Ed.) Psychological perspectives on the self. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

- Jones, E. E. & Berglas, S. 1978 Control of attributions about the self through self-handicapping strategies. The appeal of alcohol and the role of underachievement. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 200-206
- Jones, E. E., Rhodewalt, F., Quattrone, G., & Pittman, T. 1986 Self-Handicapping Scale. Unpublished manuscript.
- 上瀬由美子・堀野緑 1995 自己意識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景—青年期を通して—*教育心理学研究* 43-1 23-31
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店（改訂版：1998）
- 沼崎誠・小口孝司 1990 大学生のセルフハンディキャッピングの2次元 *社会心理学研究* 5, 42-49
- 大川力・瀧上康幸・門本泉 1988 非行少年の自己意識に関する研究（その1）*中央研究所紀要* 8 63-77
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Pre.

資料 ③ 自尊心維持方略についての質問項目一覧

ア セルフ・ハンディキャッピング（9は回答の偏りにより、尺度から除外）

- 1 ここ一番の大切なときになると、体の調子が悪くなる。
- 2 試験前「本気でやる気ないから」「適当でいいや」などと友だちに言ったことがある。
- 3 簡単なことができないと恥ずかしいので、わざと難しい方を選ぶことがある。
- 4 大事な仕事がある前の夜には、よく眠り、健康には十分気を付ける。
- 5 大事な試験や仕事の前に、つい遊んでしまい、自分の力が出しきれなかったことがある。
- 6 面接や試験を受けるようなとき、いつも準備が足りないと思う。
- 7 本気でやろうとするといつも邪魔が入る。
- 8 本気でやって失敗すると格好が悪いので、あまり本気を出していないように見せている。
- 9 好きな人にふられそうになると、たいした相手じゃないと友だちに言ったりする。

イ 自己意識の低減（4と9は因子分析の結果尺度からは除外）

- 1 やけになって酒を飲んだり、大食いしたことがある。
- 2 仲間といっしょに騒いでいると、いやなことは忘れられる。
- 3 気晴らしをするために、買い物に出かけ、つい買いすぎてしまうことがある。
- 4 気分が落ち込んだときには、落ちこんでいる原因についてじっくり考える。
- 5 嫌なことがあってイライラすると、酒やタバコの量が増える。
- 6 悲しいことがあると、いつもより羽目を外して遊んでしまう。
- 7 面白くないことがあると、いつもより長電話をして気をまぎらわせる。
- 8 心配ごとがあっても、テレビゲームなどを始めてしまうと、ゲームの方に夢中になってしまう。
- 9 何か問題が起こったら、解決するまではそれにかかりきりになる。

ウ 威嚇的自己呈示（6は回答の偏りにより、9は因子分析の結果尺度から除外）

- 1 売られたけんかは買う。
- 2 自分を馬鹿にする相手は、痛い目に合わせる。
- 3 友だちの前では度胸があるところを見せたい。
- 4 人から「恐そうな人だ」とよく言われる。

- 5 ならまれたら、ならみ返す。
 - 6 私は、いくじなしと思われたくない。
 - 7 気に入らないと、知らない人とでもけんかをしてしまう。
 - 8 生意気な相手には、力づくで言うことをきかせることもある。
 - 9 相手の方が強いと分かっていたら、絶対にけんかはしない。
- エ 哀願的自己呈示 (6と9は回答の偏りにより尺度から除外)
- 1 都合が悪くなると、本当は病気ではないのに、病気のふりをしたことがある。
 - 2 自信がないときは、素直に自分の弱いところを見せて助けてもらう。
 - 3 嫌なことがあったときは、友だちに慰めてもらいたい。
 - 4 人には自分の弱みを見せたりしない。
 - 5 ひどく落ち込んでいても、平気なふりをするほうだ。
 - 6 泣いたふりをして、自分のして欲しいことを相手にきいてもらうことがある。
 - 7 私は人から助けてもらわなくても、たくさんのかんことをやりとげてきた。
 - 8 自分がかawaiiそう人間だと思う。
 - 9 人から責められそうときは、自分がかawaiiそう人間であると相手に思わせ許してもらう。
- ④ 自己概念の不安定性
- 1 自分のことが好きになったり嫌いになったりする。
 - 2 自分の性格を変えたいと思うことがよくある。
 - 3 「人が見ている自分」は「本当の自分」と違うと感ずることがある。
 - 4 「今の自分」は「理想の自分」とずいぶんかけ離れている。